オープンスペースとしての道路における秩序の系譜 東京での大道芸と「雑業」への取締

A Historical Study on the Formation Process of Social Order over Urban Openspace through Police Offence against Street Entertainers and Junkpeople in Tokyo

野嶋政和*

Masakazu NOJIMA

摘要：本稿では、露伴を代表とする都市空間についての秩序認識と理想像についての包括的な言説群の歴史的背景を探る一環として、公共オープンスペースの秩序形成を対象とし、都市空間の変容を構造的に把握することを通じて、オープンスペースとしての道路における秩序形成のあり方を考察する。具体的には、近代都市空間における交通・防災・衛生・美観などの道路の諸機能に抵触する諸行為の排除のプロセスを、長屋・裏長屋＝「スラム」の住民の代表的な職業であり、道路などのオープンスペースを生業の空間としていた大道芸と「雑業」への取締を対象として明らかにすることを課題とする。

1. はじめにー幸田露伴「一国の首都」

1899（明治32）年に著された幸田露伴『一国の首都』は、都市論の嚆矢であり、森鷗外のように都市空間・オープンスペースの技術に纏わる論議を行っていないとはいえ、そこには都市空間・オープンスペースについての先駆的かつ包括的な言説がちりばめられている。例えば、「教育は神聖なり」、神社は「森厳神聖を保つべし」、公園は「和相親しむべき」「都府の肺臓」とする言説は¹⁾、現代に於いても流通可能であり、空間技術の開発の理念としての位置を獲得していたことは、疑い得ない²⁾。

したがって、露伴の都市空間に関する社会的言説は、都市の諸施設の機能認識が社会へと一般に適用されるという空間の装置性を踏まえた議論であるといえるだろう。例えば、その端的な事例を、学校に関する言説にみることができる。露伴は、学校の必要性をオープンスペースとの対比で論じている。「老婆少女」のいる戸外、「美しき物品を列ね示せる商家の店頭」、「錦絵舗の店頭」、「小劇場の絵看板の下」、「神祠あるいは仏寺あるいは小飲食店」、「車馬奔馳する危険の街頭」、「尊厳神聖を保ち得ざる神祠仏寺の閑地」などの街頭や社寺境内地など多様な行為が繰り広げられる空間、すなわちオープンスペースへの現状認識を「悪魔の幼稚園」と象徴的に表現している³⁾。

露伴の狙いは、学校を文明化の空間装置とする自らの言説の正当性を提示するために、オープンスペースを「悪魔の幼稚園」として二分法的一方として設定し、言説作法に組み込んでいく点に理解することができる。

しかし、言説という知による秩序の編成が、とりわけ、排除・矯正されるべき状況が如何にしたら転換させられるのかについては、露伴の社会的言説は提示してくれない。この言説による秩序の編成の実体的な側面については、これを支える実効力を有する操作が必要になってくる。

すなわち、露伴が否定的に例示している街頭や社寺境内地の空間としての多様さが、文明の光に照らされた都市空間として如何にして創出・転換されるのか。野蛮を表象する「悪魔の幼稚園」が、学校そのものの必要性に止まらず、空間装置として設定され、オープンスペースへの認識と将来像に構造的な影響を及ぼすものなのか。つまり、いかなる理由とプロセスを通じてオープンスペースと行為が野蛮なものとして認識され、排除・矯正されていったのか、これらの課題は、検証される必要があるだろう⁴⁾。

都市オープンスペースにおける制度的管理主体である警察に、こうした社会的言説の実体化の原動力を求めることができるだろう。警察の権力が実体的に行使される取締が対象とする空間は、国民国家ー市民社会の創出に際して否定されるべき「外部」像として設定され、このことを通じて、警察の取締は正当化ー正統化されることになる⁵⁾。

具体的には、警察によるオープンスペースにおける社会秩序の形成過程を検討することを課題とする。本稿の空間の対象である道路は、交通を筆頭として、防災・衛生・美観などの諸機能が制度化された空間であるが、その一方で物理的形態においてオープンであるがために、道路にはこれらの制度的機能に抵触する行為が存在したことも事実である。大道芸、「雑業」、あるいは各種の物売り、人力車の営業などは、そうした行為ー職業として考えられる。特に、社会的な差別の眼差しの下に捉えられる行為ー職業への取締には⁶⁾、「スラム」クリアランスに通底する知と権力の相互依存関係を見出すことができるだろう⁷⁾。そこで、明治期を通じて都市空間からの排除がもくろまれてきた長屋・裏長屋＝「スラム」の住民の代表的な職業でもあり、道路という都市のオープンスペースを生業の空間としていた大道芸と「雑業」への排除・矯正のプロセスを考察する。

2. 大道芸への取締

(1) 芸能の取締における位置

明治期における芸能への初期の取締としては、1876（明治9）年の諸芸人鑑札制度が挙げられる。この時期、各種の芸能は、寄席、劇場、あるいは浅草公園へと芸能の種別に対応した機能空間へと収容されはじめる⁸⁾。もっとも、大道芸の興業は、1878（明治11）年頃には、道路であっても、警察によって指定された区域では認められていた⁹⁾。ただ、それも、1887（明治20）年頃になると、大道芸は頻繁に行われることは少なくなったと言われている¹⁰⁾。

大道芸の衰微には、芸能を巡る社会的な認識の変化が大きく影響したことは、既に幾多の研究によって明らかにされているが、その衰微を条件づけた警察との関係については、さらに検討すべき余地がある。すなわち、この変化は、大道芸を対象とした警察による取締規則が実施されはじめた時期とも重なっており、明治20年前後の大道芸への取締を理解する必要がある。

*京都大学大学院農学研究科

1886（明治19）年3月、警視庁は「該營業者中住々貧民子弟ヲ略買虐待シ人身賣買ノ弊アルコトヲ認ルヲ以テナリ」との理由で「倭獅子營業者ヲ五十一名ニ制限シ漸次減却センコトヲ議決シ」¹¹⁾ている。さらに、翌4月には「角觥興行及ヒ諸觀物興行場制限ヲ議定」している。「角觥興行及ヒ諸觀物興行場制限」では、特に大道芸・見世物については以下のように決定されていた。

淺草深川公園兩公園及ヒ佐竹ヶ原本所元津輕邸其他ハ公使館學校病院ヲ距ル二町以外ノ地ニ非レハ之ヲ許サス蓋シ此要タル人民ノ權利ニ關スルヲ以テ制限ヲ一定シ之ニ據テ許否セサルハ措置區々出テ人民ノ疑惑ヲ招クノ患アルニ由リ他日取締規則ヲ布クニ至ルマテ假ニ此標準ニ依リ實地ヲ検査シ其上願ヲ許否スルニ在リ¹²⁾

この決定では、大道芸・見世物興行の許可空間として、淺草・深川公園と後に東京市区改正によって公園地に指定される佐竹ヶ原（下谷公園）と本所元津輕邸（緑町公園）が指定されているだけで、その他は明確な許可空間は規定されていなかった。この「角觥興行及ヒ諸觀物興行場制限」に触れられた暫定的な措置を改善すべく、同年4月の警視庁甲第10号布達が示されている。

近來開キ席ト称ヘ家屋又ハ小屋掛（霞實張幕張等ニシテ日日取払フモノヲ除ク）ニテ手品、輕業、手踊其他觀セ物興行スル者有之處、右ハ願書ニ區長又ハ戸長ノ奥印ヲ受ケ警視廳ニ差出免許ヲ受クヘシ。¹³⁾

見世物芸人に対して区長・戸長を通じて免許申請を行うことを義務づけた鑑札下付制度は、1889（明治22）年1月、寄席や劇場関係の芸人への鑑札下付制度の廃止時にも、継続されている。

一定ノ所ナク或ハ路頭ニ演藝スル者ノ如キハ他ニ責任ヲ負ハシムヘキ者ナキヲ以テ直ニ其取締ヲ爲サトルヲ得ス而シテ之カ取締ヲ爲スハ名籍ヲ知ラサル可カラス又此等下等ノ藝人ニ在テハ往々無賴不良ノ徒アルカ故ニ付與スルニ鑑札ヲ以テシ一ハ其身位ヲ糺シ一ハ濫雜ヲ制セサル可ラスト本令ヲ發スルヤ蓋シ此議ヲ採用スルナリ¹⁴⁾

大道芸への鑑札制度継続の理由は、落語や演劇などの芸能への取締は、寄席や劇場の経営者を媒介にした管理、言うならば閉鎖空間の管理を通じて可能になるのに対して、芸能の場所を必ずしも固定せずに興業が可能になる大道芸、すなわち開放空間＝オープンスペースを活動の場とする大道芸人に対しては、大道芸人への直接の取締が必要であったからである。さらに、大道芸人は、「下等ノ藝人」と位置付けられた上に「往々無賴不良ノ徒アル」との認識が警察に存在したことも見逃せない。この認識は、オープンスペースの管理を軸にした取締の明確化の際に、大道芸人への取締の根拠として全面に据えられることになる。

(2) 「観物場取締規則」

1891（明治24）年10月に制定された「観物場取締規則」¹⁵⁾は、以上の「暫定的」的措置に決着をつけることになった。「観物場取締規則」は、前年の8月の「寄席取締規則」と10月の「劇場取締規則」の改定に続く芸能に関する最終的な取締規則であった。「観物場取締規則」の制定は、寄席や劇場などの施設に収容され得ない、オープンスペースにおいて営まれる芸能への取締を実現することになった。芸能への施設・空間を通じた取締は、1891（明治24）年以降の警視庁の統計にも反映され、従来の芸能の種類に応じた統計区分から、劇場・寄席・観物場といった芸能の空間に対応した統計区分に変更されている。

「観物場取締規則」の第1条では、見世物・芸能の種類を「角觥、擊劍、輕業、手品、足芸、力持、曲馬、犬芸、猿芸、独樂廻、人形、太神楽、倭獅子、パノラマ、其他諸種ノ技芸動物等ノ類」と規定している。第2条では、常設観物場の設置は、淺草公園第六区と「特許ヲ得タル場所」にのみ許可され、仮設観物場の設置は、申請の上、随時許可されることになった。この第2条は、鑑

札制度の改定の際に示された屋内・屋外の図式で屋内での芸能を優位に置いたのと同様に、常設・仮設という図式で前者を優位に置く警察の芸能への序列認識を表している。第4条では、「神仏祭典縁日等ノ際從前ノ慣行アル場所ノ外開設スルコトヲ許サス」と規定され、さらに第5条では、「路上観物興業ヲ為サントスル者ハ、族籍住所氏名年齢並路上観物興業人タルコトヲ記シタル木札（堅五寸横五寸）ヲ製シ、所轄警察署ニ願出烙印ヲ受クヘシ」と規定された。表-1のように、鑑札の交付数は、その数が100となった1896（明治29）年を境に減少している。

大道芸の興行許可空間は、「観物場取締規則」の条文からだけでは理解し難いが、実施要領として各署に指令された「観物場取締規則執行心得」にやや詳しく例示されている。「観物場取締規則」における「神仏祭典縁日等ノ際從前ノ慣行アル場所」とは、「観物場取締規則執行心得」には以下のように分類されている。

社寺ノ境内又ハ空地ニ於テ興行ヲ爲スモノ雖モ縁日ノ爲メニナスモノ又ハ年ノ市草市等ニ於テ興行スルモノハ共ニ一時ノ興行ニ止ルモノナレバ路上観物ノ範圍ヲラシメサルヘカサルナリ¹⁶⁾

「観物場取締規則執行心得」から、社寺境内地での縁日や定期市の場合における大道芸の興業は、禁止されていなかったことがわかる。「観物場取締規則」で禁止されたのは、「從來ノ慣習ニヨレバ大道観物ト称シ平日ニ在テ公道中ノ廣場若クハ空地ニ於テ無願ニテ手品輕業等ヲ興行シ觀客ヨリ隨時棄財ヲ請求スルノ一種」としての大道芸であった。

ではどういった理由で、社寺境内地での祭礼・縁日あるいは定期市の際の大道芸は容認され、「平日ニ在テ公道中ノ廣場若クハ空地」での大道芸は禁止されることになったのであろうか。公共オープンスペースにおける日常的に営まれていた大道芸に対して厳しい制限が行われた理由はどのようなものだろうか。大道芸の内容そのものに基づく判断を示す警察関連史料は確認できないが、警察の大道芸人への認識をみることによって、この理由の一端を明らかにできる。「観物場取締規則執行心得」の付録文書である「観物場取締規則説明書」には、警察の大道芸人観が示されている。「観物場取締規則説明書」を引用してみよう。

路上観物ハ公道ヲ使用スルモノニシテ交通上ノ妨害ヲナス蓋シ尠シトナサス然レトモ古來ノ因襲ニシテ理勢亦不得止モノアリ故ニ姑ラク其舊慣ニ從ヒテ之ヲ存シ多少ノ制限ヲ立テタリ蓋シ路上ニ於テ營業ヲ爲スモノハ畢竟貧民タルニ不過故ニ其生計ノ途ヲ失ハサランメンガ爲從來ヨリ本業ニ從事シ尚且將來繼續セントスル者ニ限り免許スヘキノ方針ヲ以テ（中略）畢竟營業者ニ利便ヲ与ヘタルニ不過雖モ亦以テ之ヲ制限シ將來増殖ノ弊ヲ防クノ趣旨ニ外ナラザルナリ¹⁷⁾

この「観物場取締規則説明書」には、大道芸への取締の理由として、第一に交通の妨害となることが述べられている。しかし、引き続き箇所から交通上の理由は付随的であったと考えられる。大道芸の制限の背景には、大道芸に対する警察の認識が存在していた。大道芸は、「古來ノ因襲」である「貧民」の職業であり、全面禁止は「貧民」の生活を脅かすことになり、温情的に認めるものである、ただし、「將來増殖ノ弊」は防がれねばならない職業である、という認識が改めて確認されていたのである。

ところで、1885（明治18）年に内務省警保局によって編集・刊行された行政警察の手引書『警務要書』には、「將來増殖ノ弊」となる大道芸認識の具体例を読み取ることができる。『警務要書』では、大道芸の取締について以下のように記されている。

齒抜・居合抜等ヲ為シ、又ハ祭文・チョボクレ・辻講釈・音曲・手踊等ノ遊芸ヲ演ジ、各地ニ徘徊スル者ノ如キハ、偷盜・誘拐等ヲ為スノ弊害少ナカラザルヲ以テ宜ク視察スベシ¹⁸⁾

『警務要書』では、大道芸人は「各地ニ徘徊スル者」であり、

「偷盜・誘拐等ヲ為スノ弊害少ナカラザル」存在として規定されている。『警務要書』の大道芸人への認識は、「観物場取締規則説明書」での大道芸（人）観を凌ぐもので、「犯罪人」

と同等の存在として捉えられていた。大道芸と同じく路上を生業の場としていた「乞丐及浮浪」に対しては、1891（明治24）年に『警務要書』に準拠して作成された警察行政の手引書『監査標準』には、取締の目的を「風俗又ハ安寧ノ保持」とし、その具体的な取締対象は、「強ニシテ人ノ門口ニ就キ又ハ路上ニ於テ哀憐ヲ乞フ者」「往來ニ於テ強ニシテ施物ヲ乞ヒ若クハ幼兒ヲシテ之ヲ乞ハシムル者等」「往來又ハ人家ニ至リ物品等ヲ押賣シ或ハ種々ノ名義ニ托シ出錢ヲ乞フ者」「乞丐浮浪ノ徒ニシテ不相應ナル金錢衣類又ハ其他ノ物品ヲ所持シ若クハ兇器類ヲ携帯スル者等」と例示されていた。¹⁹⁾

「乞丐及浮浪」とは、職業としてではなく行為として規定されているのだが、その行為とは、「強ニシテ」「哀憐ヲ乞フ」ことであり、「強ニシテ施物ヲ乞」ふことであり、「押賣」であり、「不相應ナル金錢衣類又ハ其他ノ物品ヲ所持」することであり、「兇器類ヲ携帯スル」ことである。これらの行為と大道芸とは同一のレベルで捉えられているのである。「乞丐及浮浪」への予防拘禁的な取締それ自体も、警察の権力性を示すものであるが、大道芸（人）も、「犯罪者」と同等の扱いを受け、「犯罪」を犯す虞のある者として予防の対象の枠内に組み込まれていたのである。

公共オープンスペースである道路では、交通機能の確保が警察の取締の根拠として理解されることは謂うまでもないが、その根拠を詳しく検討すると、治安・秩序維持それ自体が、重要な課題として設定されていたことが理解される。大道芸は、いずれ衰微する芸能との認識を示しつつも、「將來増殖ノ弊」は防がれねばならないとする警察の認識の意味が改めて確認できる。

警察の大道芸に対する見方は、新聞紙上にも反映されている。以下にみる引用は、1893（明治26）年の新聞記事である。

細民が其日其日を送るには、種々なる職業あり。屑屋、磨砂壳、飴屋、按摩、日雇、古下駄買、空樽買等、一々枚挙に遑あらず。中に就き、彼等の居常放逸に流れ、酒色に其身を墮落せし輩は、堅気の職業に従事する能はざるより、止むを得ず芝居流行の今日、芸人社会に雇われ、馬の後足申し上げますの俳優となるあれば、或は浄瑠璃、祭文、チョンガレ、新内、流行節、落語、物真似師、俄か師となり、上等は一日寄席に出て十五、六銭内外を貰ひ、下等は路傍、門先に立ち八、九銭を得る者あり。²⁰⁾

この新聞記事でも、大道芸とは「堅気の職業に従事する」ことができない「居常放逸に流れ、酒色に其身を墮落せし輩」として捉えられている。また、1900（明治33）年にも、同様の大道芸観が記録されている。

芸と云へば芸、芸でないと言へば芸でない、今教へられて今出来さうな事をして人の憐みを乞ふてゐる者も、右の外にまだ無いではないが、これ等は純然たる物貰ひであるゆゑ一々は記さぬ、何にせよ道路取締の厳くなつたのと、其筋の所謂『観覧物』なる見せ物が立派になつたのとで、昔からある大道芸の過半は或は衰へ或は滅びた、際物的の芸人や普通の門附やが消失せるのも恐らく遠き事ではあるまい、江戸の遺物の人が全く亡せる頃には江戸の名残の大道芸も亡せ尽して。遺るのは噂ばかりでがな。²¹⁾

この1900（明治33）年の新聞記事は、大道芸の衰微という観点から書かれた記事であるが、この記事でも大道芸人は「純然たる物貰ひ」として捉えられている。警察の取締およびそれを支える認識と、新聞記事という社会的な認識とは、おそらく相互依存

表－1 大道芸、路上観物への鑑札交付数（『警視庁統計書』）

	明治24年	25年	26年	27年	28年	29年	30年	31年	32年	33年	34年	35年	36年	37年	38年	39年	40年
東京府全体	25	*	89	86	93	100	94	62	53	44	51	50	42	35	24	26	44
東京市部・4宿						95	91	62	41	43	49	48	40	33	23	25	42

的な関係をもって形成されてきたものであろうが、大道芸を巡る警察の取締と新聞報道からは、大道芸は芸能として認知されておらず、オープンスペースの風俗を乱す、治安を乱す、交通を妨害する職業として捉えられていたことが理解される。いわば、大道芸は「正業」としてではなく「遊業」として認識されていた²²⁾。

(3) 「観物場取締規則」の改定－大道芸の排除

1901（明治34）年7月、「観物場取締規則」は改定によって、同年10月以降、東京の都市部での大道芸の興行が全面的に禁じられることとなった。

路上観物ハ興行スルコトヲ許サス但シ郡部（品川町、内藤新宿町、南千住町、千住町ヲ除ク）ニシテ神佛祭典縁日等ノ際從前ノ慣行アル場所ニ於テハ此ノ限ニ在ラス（後略）²³⁾

この「観物場取締規則」の改定を巡る様子は、以下のように報道されている。

東京市内に於て路上観物を興行するもの四十六人、之れに附属するもの百十一人あり。日夜縁日等に出て路上に小屋掛を爲して、手踊其他の観物を興行するものなるが、右は交通を妨たぐるのみならず、往々風俗を害するものあるを以て、警視庁にては断然之を禁止するの方針を取り、先般來取締中なりしが既に結了せしを以て、来る十月一日より施行する筈にて近々庁令を以て発布する由なり。²⁴⁾

1891（明治24）年の「観物場取締規則」では、都市部においても社寺境内地や定期市・縁日が開かれる公道での大道芸は禁止されていなかった。しかし、この改定によって、市内および周辺の品川町、内藤新宿町、南千住町、千住町といった東京の都市部では、従來容認されていた社寺境内地や縁日・定期市での大道芸の興行を含めて全面的に禁じられることになったのである。

東京の都市部での大道芸の全面的禁止の第一の理由は、「観物場取締規則」改定を伝える上記の新聞報道に確認することができるのだが、そこでは、道路からの大道芸の排除による交通機能の確保が挙げられているだけである。しかし、既に考察してきた大道芸への警察の見方から判断すれば、第二の理由に挙げられている風俗の取締を行うことも取締規則改正の主要な狙いであると判断される。

「観物場取締規則」改定の前年の1900（明治33）年6月には、従來の「街路取締規則」が大幅に改定され、新たに「道路取締規則」が発令されていた。「道路取締規則」の条文は、通則に始まって順に「安寧」「通行」「風紀」「清潔」が具体的な項目として章立てされていた。「安寧」は道路の秩序形成にとって基底的な要素として捉えられていた²⁵⁾。

さらに、大道芸に対する警察の観点を見たが、この警察の大道芸観と「道路取締規則」にみられるオープンスペースの秩序として「安寧」が挙げられていることを考えるならば、「観物場取締規則」の改定は、「道路取締規則」と連携して道路というオープンスペースの秩序を「安寧」の名の下に実現しようとするものであったと指摘できるだろう。治安や風俗を乱す、「貧民」による「遊業」である大道芸への取締がおこなわれたのである。

既に見世物の多くは、興行場に収容されていたのだが、「観物場取締規則」の改定によって都市の道路から完全に大道芸が排除されることになった。大道芸が許可された社寺境内地は既に露店商の営業活動が行われており、大道芸人が社寺境内地で興行することは、実質的には極めて困難であった、とされる。大道芸人は何とか路上での興行の再開を求め警視庁に対して嘆願を繰り返し

ているが、大道芸人の嘆願を新聞は冷たく報じている²⁶⁾。

3. 「雑業」への取締

(1) 排除の対象としての「雑業」

一方、大道芸と同様に道路を生業の空間としていた「雑業」は、1900（明治33）年に改定された「雑業取締規則」で、屋外で営業を行うものと規定されていた。中でも、一貫して「雑業」に組み込まれていた屑拾は、「スラム」の住人の代表的な職業とされていた。

「雑業」への取締が本格化し始めた明治20年前後には、例えば、『朝野新聞』に、「乞食」狩りが行われた際に、紙屑拾の鑑札願を申請した者が354人であったと報道されているように²⁷⁾、「雑業」は「無業」「遊業」に近い職業として認識されていた。また、明治20年代に数多く発表された「スラム」探訪物のルポルタージュでは、「雑業」の代表的職種である屑拾は、他聞に洩れず以下のような描写が行われていた。

貧民中もっとも収入が少なきものはそれ屑拾か。しかしながら、収入の少なきよりして然るか、犯罪に近きよりして然るかは知らざれども、屑拾に盗人根性なきは少なく、その大半はカッパライの者流なり。（中略）人類に近き一種の猿猴地球上に生存す。万年町に乞食あり、掏児あり、屑拾は細民としては生業者の性質を以てして、かつ時に乞食時に窃盗の傾向を兼ね備えて、しかももっぱら乞食するにあたわず掏児たるあたわざる半人的猿猴なるか。²⁸⁾

「雑業」への取締も芸能の取締と同様に明治初年から開始され、「區戸長ニ令シ紙屑買屑拾及ヒ履履ヲ修ルヲ以テ業トスル者覆面徘徊スルノ弊習ヲ禁遏セシム」（明治9年6月）、「紙屑拾ヒヲ以テ業トスル者ハ本署検印ノ鑑札ヲ顯帶セシム」（明治11年4月）などの取締が行われていた²⁹⁾。

1891（明治24）年に警察の内部資料である「監査標準」においても、取締の要点として以下のことが挙げられていた。

- 一 成規ノ表札ヲ屑籠又ハ道具箱ニ表出セス又警察署ノ検印ヲ受ケサル標札ヲ掲クルモノナキヤ否
- 一 風呂敷又ハ布囊ノ類ヲ携帯シ窃カニ屑買ヒ屑拾ヒヲ営業トスルモノナキヤ否
- 一 轉居改氏名ヲナシ標札面ニ變更ヲ生シ又ハ遺失毀損スルモ三日以内ニ届出テス若クハ更ニ書替・印ヲ受ケサルモノナキヤ否³⁰⁾

営業の制限としては、例えば1903（明治36）年12月の「雑業取締規則」第8条では「雑業ハ日出前、日没後ニ於テハ之ヲ為スコトヲ得ス」という規定が、第9条では「雑業ヲ為ス者ハ居住者又ハ管理者ノ承諾ヲ受クルニ非サレハ其邸宅、建設物又ハ路次内ニ入ルヘカラス」という規定が示されている³¹⁾。「雑業」への取締にも、先に見た大道芸や「乞丐及浮浪」への取締と同様の視点が含まれ、公共空間である道路の秩序を乱す虞れがあるとの判断で行われていたことが、条文に読み取ることができる。

(2) 管理の対象としての「雑業」

しかし、「雑業」への取締は、大道芸への取締とは異なる点があった。大道芸への取締は、芸能の変容の中で芸能として意義が薄れていく過程で、大道芸を禁止・排除していくものであったのに対して、「雑業」への取締の推移は異なっている。その典型的な指標となるのが、「雑業」として取締の対象となった職種の増加である。「雑業」の職種は、「雑業」への取締規則の改定に伴い次第に拡大されている。

(1)1888（明治21）年12月に「紙屑買ヒ紙屑拾ヒ及ヒ下足直シ渡世ノ者」に関する取締規則が制定された³²⁾。(2)1893（明治26）年10月に「雑業渡世取締規則」として改めて定められた。この改定では、職種に毀硝子買が加えられ、4つの職業の定義として屋

表－2 東京市内「雑業」鑑札交付数（『警視庁統計書』） 合計は明治27年までは延べ交付数、明治34・37年は被交付者数。職業は明治21・26・33・36年の改定で拡大している。その他は、空樽買、靴直、洋傘直、帽子洗濯、羅宇替。

	明治18年	19年	20年	21年	22年	23年	27年	34年	37年
紙屑拾	252	559	653	863	697	868	890	321	504
紙屑買					2924	3976	6484	2247	2940
下駄直					518	751	871	692	1018
硝子毀買							2386	2336	3020
綿屑								2537	2931
襦襖								2189	2917
その他									1446
雑業合計						5595	7631	4746	6183

外の生業という定義が示された³³⁾。(3)1900（明治33）年12月には「雑業取締規則」として再度改められた。「雑業」の職種としては、「綿屑、襦襖、紙屑、毀レ硝子其ノ他屑物類ノ賣買及下足直、紙屑拾等ノ営業」とされた³⁴⁾。(4)1903（明治36）年12月「雑業取締規則」では、さらに取締の対象が拡大され、「一 紙屑買、綿屑買、襦襖買、空樽買、毀レ硝子買」、「二 下駄直、靴直、洋傘直、帽子洗濯直」、「三 煙管羅宇替」、「四 紙屑拾」と4種11職へと多岐に及んでいる³⁵⁾。

以上のように、「雑業」の職種は、当初は、「紙屑買」「紙屑拾」「下足直」の3職であったのが、種別分類の導入とともに拡大された。「雑業」としての取締の職種の拡大は、大道芸が「温情的」な措置によって路上での活動を許可され、最終的には市街地の路上から追放されたのとは異なっていた。また、「雑業」が大道芸と異なる点は、表－2のように、取締規則の対象とする業種を拡大すれば必ず鑑札交付数が増加していた点にもみることができる。「雑業」は、警察の取締の対象となりながらも、「雑業」者の数が増加した理由は、東京の人口の増加によって、職業が扱う物資や需要が高まり、その必要性も高まったことによるだろう。

「雑業」は、排除された大道芸とは異なり、都市空間にとって不可欠な存在へと転換していた。「雑業」への取締の対象の拡大は、かつての「無業」「遊業」「乞丐及浮浪」としての認識から、「正業」として認識されるようになった「雑業」を漏れなく管理の対象に組み込むことであった。

(3) 排除される「雑業」

以降、「雑業」は、都市のコンテクストに位置付けられながら警察の管理－取締を受けることになる。1900（明治33）年の「雑業取締規則」改定の際には、取締規則の約半分の条文に、「貯蔵場、選分場、荷造場、干燥場」に関する条文が加えられている。この条文は、「紙屑買、綿屑買、襦襖買、空樽買、毀レ硝子買」業者を念頭に置いたもので、その内容は、開設の際の許可、完成の際の届出、防火対策等についての規則であった³⁶⁾。

さらに、1903（明治36）年12月に、以上の「貯蔵場、選分場、荷造場、干燥場」に関する条文は、「屑物取扱場取締規則」として独立した取締規則へと改定されている。第1条では屑物取扱場を「紙屑、綿屑、襦襖其ノ他屑物類ノ貯蔵、選分、干燥、荷造等ヲ為ス場所」と規定している。そしてこの屑物取扱場は、第2条において「東京市外人家稀疎ノ地ニシテ道路ニ沿ハサル場所ニ非サレハ建設スルコトヲ許セス」と立地の制限が課せられ、1907（明治40）年以降の東京市内からの排除を規定した³⁷⁾。

もっとも付則第22条で「市部及市部接続ノ郡部市街地ニ於ケル現在ノ紙屑、綿屑、襦襖等ノ貯蔵場、選分場、干燥場、荷造場ハ明治四十年六月迄使用スルコトヲ得」あるいは第3条で「屑物類ノ取扱ヲ業ト為ス者ハ屑物置場ヲ設ケ仮ニ屑物類ヲ貯蔵スルコトヲ得」として「前項仮貯蔵ノ屑物類ハ速ニ屑物取扱場ニ移スヘシ」という規定が存在し、即時の設置禁止を示したものではなく、暫定的措置はとられていた³⁸⁾。

ともあれ、以上の「雑業取締規則」の際の空間規定の追加と「屑物取扱場取締規則」の制定は、秩序形成という観点からのオープンスペースにおける取締から、東京の空間構造に関わる取締への展開点として考えられる。特に「屑物取扱場取締規則」の改定は重要な意味を有している。

「屑物取扱場取締規則」の改定の背景には、長屋建築規則がコレラの流行を契機として予防対策の一環として検討されていたように³⁹⁾、ペストの流行があった。ペストの流行は日本では1899（明治32）年に神戸で始まっている。ペストはコレラなどの水系伝染病ではなく、ネズミを媒介とするため、ペスト対策は具体的には防鼠対策として展開された。東京市では、ネズミの買上などを実施していたのだが、警察では独自の対応策として「屑物取扱場取締規則」を制定したのであった。

「屑物取扱場取締規則」制定の根拠は、1897（明治30）年3月の「伝染病予防法」において伝染病予防に関する各種制限・禁止の権限が地方長官に委任されていた点にあった⁴⁰⁾。この権限には「古着、襦袢、古綿其他ノ病毒傳播ノ虞アル物件ノ出入ヲ制限シ若ハ停止シ又ハ其ノ物件ヲ廢棄スルコト」が含まれていた。

「屑物取扱場取締規則」制定以前の1902（明治35）年1月には、この権限の下に岩手県と茨城県では、ペストが発生した東京を経由する古着類の移入を停止する県令が発令され、通報を受けた東京では警視庁告示が発せられている。さらには、1905（明治38）年1月には深川で発生したペストの防疫対策として、警視庁によって深川からの「屑物」の搬出が禁止されている⁴¹⁾。「屑物取扱場取締規則」は、営業行為から空間そのものへの管理を実現するものとして制定されたのである。

屑物取扱場の立地は、1903（明治36）年の「屑物取扱場取締規則」制定とほぼ同時に変化し始めている。芝区・京橋区・牛込区では減少し、1908（明治37）年では小石川区・下谷区では激増しており、従来から最も立地数が多かった浅草区でも増加している。「屑物取扱場取締規則」の立地制限が全面的に施行された1907（明治40）年には、屑物取扱場は東京市内から一掃され、東京に隣接する板橋・千住警察署管内に集中的に移転している。

横山源之助は、屑物取扱場の市外への排除の様子を1912（明治45）年の『貧街十五年間の移動』でこう記述している。

転じて郡部または郡部に近き貧民部落を物色するに、近頃雑業者が増殖して来たのは、前掲の如く千住附近の貧民部落で、巣鴨、日暮里、三河島の市街にも、貧民の住居が目眩らしく殖えて来た。（中略）そはともかく十数年前までは、東京の貧民窟といえば、「万年町」「鮫ヶ橋」「新網」の三ヶ処にトドメを指したものだが、今はそうではない、比較的中央を離れて、本所、深川の場末に移った。豊島、葛飾、荏原の郡部に襦袢の世界は形成られている。十五年前の記憶を辿れば、日清戦役前頃までは、万年町二丁目は屑拾を以て占められ、屑拾いといえば、ほとんど万年町の住民を代表しているやの観があった。（中略）さきに万年町一体で壟断していた屑拾いが、漸次各区に放散し、特に郡部に散在しつつある一般は想像せらるるであろう。ただ屑拾いのみならず、紙屑買い、毀れ硝子買い、下足直し、洋傘直し、羅字換え等の雑業者は、かつて万年町、鮫ヶ橋、新網特色の住民であったが、今は郡部に流れている。⁴²⁾

横山は、「貧街十五年間の移動」を「雑業」者の移動として表現しているが、屑物取扱場の強制移転に伴ったものであると読むべきであろう。屑物取扱場の移動は、ペストの流行に際して、ネズミが繁殖しやすい「屑物」を扱う空間と業者を市外へと排除するという警察の伝染病対策によるものであった。屑物取扱場の東京市内からの排除は、伝染病対策として直接の因果関係を根拠として実施されたことは事実であろうが、「スラム」クリアランス

表－3 「屑物取扱場」数（『警視庁統計書』）
明治36年までは店舗数、明治37年以降は屑物取扱場数

	明治34年	35年	36年	37年	38年	39年	40年	41年	42年	43年	44年
麹町区	6	5	5	5	5	3	3	0	0	0	0
神田区	13	13	13	15	14	14	11	0	0	0	0
日本橋区	6	6	6	5	5	6	7	0	0	0	0
京橋区	17	17	17	6	6	6	6	0	0	0	0
芝区	22	21	22	14	15	4	3	0	0	0	0
麻布区	8	9	9	9	9	8	7	0	0	0	0
赤坂区	7	7	3	5	5	3	2	0	0	0	0
四谷区	7	7	9	9	9	7	5	0	0	0	0
牛込区	17	26	26	4	5	6	3	0	0	0	0
小石川区	4	4	4	23	23	21	23	0	0	0	0
本郷区	8	9	6	7	8	4	4	0	0	0	0
下谷区	12	11	12	70	64	52	52	0	0	0	0
浅草区	151	152	150	193	190	154	109	0	0	0	0
本所区	20	24	30	26	25	23	13	0	0	0	0
深川区	32	32	33	34	34	61	58	0	0	0	0
市内合計	330	334	345	425	417	372	306	0	0	0	0
品川	9	9	9	8	9	12	15	14	16	15	15
新宿	0	0	0	2	2	5	6	6	6	11	11
板橋	5	5	6	5	7	8	79	123	133	149	154
千住	37	40	41	43	45	42	61	72	72	75	81
小松川	0	0	0	1	2	2	11	18	20	24	28
隣接地合計	54	54	56	58	65	69	172	233	247	274	289
合計	381	338	401	483	482	441	478	233	247	274	289

という権力による空間操作という観点から整理しておくべき必要がある。

衛生学＝衛生行政を学問のひとつの専門領域として確立されたものであると常識化すれば、伝染病との因果関係を「屑物取扱場」に求めるのは容易かもしれない。当時の衛生行政においては伝染病の対策として、もっとも一般的な考え方としてあったのは隔離・排除の原則であった。「屑物取扱場取締規則」は、「屑物取扱場」の東京市外への追放というクリアランスの方法をとったのであった。この「クリアランス」は、木賃宿のクリアランスをさらに強固にするものとして、東京における「スラム」クリアランスの一環として機能することになったのである。

「雑業」は、取締開始の当初は道路・公共オープンスペースの秩序を乱す虞れのある職業として認識されることによって取締規則の対象とされたのだが、都市の成長とともに「雑業」取締の職種は増加し、それに応じて鑑札を受ける「雑業」者も増加した。この意味では、前述したように「雑業」は「正業」として認められることになった。しかしながら、伝染病対策に直面したとき、警察の取締によって東京市内から排除されたのである。

4. まとめ

大道芸と「雑業」という二つの生業への警察の取締は、明治の三大「スラム」と呼ばれた四谷鮫河橋、芝新網、下谷万年町の解体とも関連していた。最も簡便な居住空間であった木賃宿とともにこれらの職業は、治安対策、風俗改良、伝染病予防と取締の理由は異なっているものの、東京市内から排除された。これらの職業の東京市内からの排除・追放は、物理的空間形態の排除としてだけではなく、生活様式あるいは生活様式と結合して語られる職業への差別視による排除として考えられる。「スラム」クリアランスの制度化は、明治末期の「長屋構造制限令」の制定を待たなければならなかったのだが、既に特定の職業への差別的措置によって、1887（明治20）年前後の長屋建築規則制定の中で構想された「スラム」クリアランスの一部分は実質的に実現されたといつてよい。都市空間そのものが空間装置として意識されるようになったことを、大道芸や「雑業」への取締に見られる都市オープンスペースである道路における秩序形成プロセスは示している。

個別的取締による「スラム」クリアランスは、オープンスペースとしての道路における多様な行為への警察による空間秩序の形成と強制的運用によって実現していた。都市空間・オープンスペースへの警察の取締は、近代都市の空間秩序を形成し、木賃宿、大道芸、「雑業」への取締は東京の空間構造を規定する要因となった。もちろん、この三つ取締が東京の空間構造の編成に规定的な影響を与えたと判断することはできないが、警察の取締によって誘導・促進されたと指摘することはゆるされるだろう。

そして、さらに大道芸と「雑業」の都市空間からの排除・管理という空間操作は、公園や社寺境内地などの制度化されたオープ

ンスペースに関する社会的言説の正当性を示し、歴史的には正統の系譜を根拠づける参照項として、警察の独自の目的を越えて構造的に機能することになるのである。

本論冒頭でみてきたように、多様な行為を排除することを含意する言説の成立の背景には、すなわち言説という知による秩序の実体化の背景には、警察による取締が存在していたことを、確認することができる以上、近代都市空間・オープンスペースの言説を表象する露伴の「一国の首都」を現代において読む際には、知と権力の相互関係が存在していたということに留意すべきであろう⁴³⁾。

注・引用・参考文献

- 1) 幸田露伴 (1899): 一国の首都, 引用は岩波文庫版 (1993), 81, 103, 107, 110
- 2) 榎並重行・三橋俊明 (1989): 細民窟と博覧会: JICC 出版局
- 3) 前掲: 一国の首都: 岩波文庫版, 81-82
- 4) 空間装置は, 社会を論述したり転換させようとする際の参照項として機能したという構造的役割については, 造園・建築・都市計画などの専門領域から歴史を再構成する際にはつねに留意すべきことであるだろう。M・ド・セルトー・山田登世子訳 (1987): 日常実践のポイエティック: 国文社, G・ドゥボール・木下誠訳 (1993): スペクタクルの社会: 平凡社
- 5) 例えば, 明治後半期に洗練された「スラム」クリアランスにあたっても同様のことを指摘できる。拙稿 (1996): 近代都市空間の秩序形成過程における衛生思想と警察: ランドスケープ研究 60(5), 441-446
- 6) 社会的差別の形成過程については, 以下の文献を参照のこと大串夏身 (1980): 近代被差別部落史研究: 明石書店, 安保則夫 (1989): ミナト神戸 コレラ・ペスト・スム: 学芸出版社
- 7) 中川清 (1985): 日本の都市下層: 劉草書房。中川は機能的な観点から都市下層を分類しているが, 大道芸と「雑業」は, 江戸から明治へと転換する過程で変容・強化された社会的な差別構造において存在した職業であることを看過してはならないだろう。
- 8) 初期芸能取締については土肥真人 (1993): 江戸から東京への都市オープンスペースの変容: 京都大学造園学研究室, 大日方純夫 (1992): 日本近代国家の成立と警察: 校倉書房, 石塚裕道 (1991): 日本近代都市論: 東京大学出版会を参照せよ
- 9) 東京市史稿: 市街篇第 59, 210-213
- 10) 倉田喜弘編 (1984): 明治の演芸 (五): 国立劇場
- 11) 警視廳史稿: 上巻 (1893), 引用は内務省警保局 (1926): 廳府縣警察沿革史其ノ一, 487-488
- 12) 東京市史稿: 市街篇第 74
- 13) 前掲: 廳府縣警察沿革史其ノ一, 589-590
- 14) 東京市史稿: 市街篇第 82, 350-356
- 15) 大道芸の許可空間は, 従前の慣行のある場所と規定されるだけで, 区域は明示されていない。同時に制定された「街路取締規則執行心得」には, 露店商への取締規定が存在し, 常時出店の許可区域の規定が存在する。(警視庁令鑑: 明治 24 年) 第十條 常時路商ノ出店場所及使用區域ハ左ノ制限ニ依ラシムヘシ
一 出店場所ハ幅員五間以上ノ道路ニ在テハ兩側, 人道車馬道ノ區別アル場所ノ幅員ニ間以上ノ人道ニ在テハ片側ニシテ交通ノ支障ナキ所ニ限ル事但舊廓内 (櫻田, 日比谷, 數寄屋, 鍛冶橋, 呉服橋, 常盤橋, 神田橋, 一ツ橋, 雉子橋, 半蔵ノ九門内) ノ道路ニ於テハ道幅ノ如何ニ拘ハラス出店スルヲ得サル事
二 (略)
- 16) 東京都公文書館蔵 警視庁令鑑: 明治 24 年
- 17) 同上
- 18) 同上
- 19) 由井正臣・大日方純夫編 (1990): 官僚制警察: 岩波書店, 363
- 20) 大阪朝日新聞: 明治 26 年 9 月 18 日, 引用は前掲: 明治の演芸 (五), 299-300
- 21) 秋風道人 (1904): 文芸界: 3 巻 2, 引用は原田伴彦他監修 (1987): 近代部落史資料集成 第 4 巻, 101-106
- 22) 近代大衆芸能史は, 網野善彦他編 (1991): 大道芸と見世物: 平凡社, 倉田喜弘編 (1988): 芸能: 岩波書店等を参照せよ。
- 23) 東京都公文書館蔵 警視庁東京府公報: 明治 34 年 7 月 25 日
- 24) 東京朝日: 明治 34 年 7 月 21 日, 引用は倉田喜弘編 (1986): 明治の演芸 (七): 国立劇場, 329
- 25) 警視庁東京府公報: 明治 33 年 6 月 21 日
- 26) 東京朝日: 明治 34 年 10 月 5 日, 10 月 20 日, 11 月 1 日, 引用は前掲: 明治の演芸 (七), 332-334
- 27) 朝野新聞: 1886 (明治 19) 年 4 月 19 日
- 28) 横山源之助 (1899): 日本之下層社会: 教文館, 引用は岩波文庫版, 45, 他には, 桜田文吾 (1891): 貧天地饑寒窟探検記, 松原岩五郎 (1893): 最暗黒の東京
- 29) 前掲: 廳府縣警察沿革史 其ノ一, 133, 203
- 30) 警視庁令鑑: 明治 24 年
- 31) 警視庁東京府公報: 明治 36 年 12 月 22 日
- 32) 同上: 明治 21 年 10 月 17 日
- 33) 同上: 明治 26 年 10 月 21 日
- 34) 同上: 明治 33 年 12 月 28 日
- 35) 同上: 明治 36 年 12 月 22 日
- 36) 同上: 明治 33 年 12 月 28 日
- 37) 同上: 明治 36 年 12 月 28 日
- 38) 同上: 明治 36 年 12 月 28 日
- 39) 田中祥夫 (1985): 明治 19-20 年東京府による長屋建築規則案不成立における経緯とその理由について: 日本建築学会論文報告集 390 号
- 40) 「伝染病予防法」については小栗史朗 (1981): 地方衛生行政の創設過程: 医療図書出版社, 259-274 に詳しい
- 41) 東京府警視庁公報: 明治 36 年 1 月 17 日, 明治 38 年 6 月 8 日
- 42) 横山源之助 (1912): 貧街十五年間の移動, 引用は前掲: 明治東京下層生活誌, 269
- 43) 確かに, 現代にも通じる都市論としての評価は揺るがないにせよ, 露伴の言説を現代においても理想的な言説として理解することは, 本論で提示してきた多様性の排除の系譜を容認することにもなるだろう。すなわち, 合理性に彩られる都市空間の近代化を巡る理論や言説の背景には, 多様性を排除・矯正する暴力が担保されてきた, という歴史的事実を捨象することになるだろう。もちろん, 本稿での結論は, 歴史上警察は常に暴力的であったという因果論的評価に与してはならない。そうではなく, 警察という歴史的主体は自立的に暴力性を獲得したのではなく, 国民国家を形成しようとする社会システム構造に実体論的にも認識論的にも組み込まれていたことを, 近代化における知と権力の相互依存関係を, 厳然たる事実として確認できるのである。

Summary : The purpose of this study is to pursuit the genealogy of discourses over modern urban openspace and the process of social order formation on openspace by police in Tokyo during late Meiji era. On that time, two kinds of works were controlled. They were street entertainers and junkpeople. The street entertainers were cleared from any street in Tokyo under the pretext that they were dangerous and lazy for civil society. On the other hand, junkpeople were recognized as the same way at first, but instead of clearance, they were strictly controlled by their licence and the limit of their business. Therefore, it could conclude that nowadays familiar and orderly discourses had formed through the relationship between modern knowledge and social power structure.